

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年三月三日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

狂言 萩大名(はぎだいみょう)

訴訟がかない、近日帰国する田舎大名が、在京中の気晴らしに遊山に出、太郎冠者なじみの清水坂の茶屋へ立ち寄り、庭の萩を見物します。田舎者の悲しさは庭褒めの言葉に品がなく、食い気や実用への見立てに冠者が「しい」を連発します。当座の和歌も打ち合わせどおりには思い出せず、あきれた冠者が姿を隠したものですから、苦し紛れに末句を「太郎冠者が向かふ脛」(スネはハギとも言います)と詠んで、怒った茶屋に追い払われます。

能 花月(かげつ)

筑紫彦山の麓に住む僧(ワキ)は一人子がその七歳の年に行方知れずとなり、それを機縁に出家して諸国を廻る修行中です。花の都の清水寺には花月(シテ)を名乗る異形の喝食(有髪の侍童)が現れて、名前の由来の深遠でしゃれた口上や門前の男を相手にした小歌の遊び、花を散らす鶯を射るかと思えて殺生戒は破らず、清水寺のいわれを曲舞に仕立てたりと、まことに芸達者な少年です。僧は少年が我が子であることに気づきます。少年はさらに羯鼓を打ち、鼈を摩つて、天狗に取られて諸国の山巡りをした体験を思いやります。七歳以来、天狗の恐怖という一種の憑物による心の乱れがまずあり、それを統御するすべを芸尽くし(遊狂)の中に見いだしてゆくという成長の過程が認められます。山巡りの深い思いを告白する花月ショー最後の芸で、見物衆はいつも感動が極まるのですが、今日は父子が再会して、卓越した芸能少年の現在からさらに高い境地への修行の旅を始めます。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

(装束附)

喝食鬘をつけ 後折烏帽子をいただき 喝食面をかける。

摺箔を着付けにし 白大口をはき、水衣を着て、腰帯をしめる。喝鼓をつける。